

## 第 582 回：おすすめ図書の紹介 (MS)

こんにちは、火曜日担当の MS です。梅雨が明けて、ますます暑くなってきましたね。どうぞお身体を大切にお過ごしください。

今回は、図書館に所蔵されているおすすめの本を紹介いたします。高田博行・椎名美智・小野寺典子（編著）の『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』です。

近年日本において著しい発展を遂げている歴史語用論分野を、外大のみなさんに紹介したいと思ったのが紹介の理由です。また、私が先月『なぜ英語の「あなた」は「あなたがた」でもあるのか～歴史語用論への招待～』と題した、英語における二人称代名詞の推移と用法に関するイベントを開いたこととも関係しています。英語の時代区分ごとの二人称代名詞の用法について、当時のテキストの読解を交えて議論したのですが、そのようなアプローチが歴史語用論研究に分類されます。

まず、本書は歴史語用論の基礎的な知識の紹介である第 1 章・第 2 章と、第 3 章から第 11 章の事例研究から構成されています。

第 1 章ですが、そもそも歴史語用論とは何かという解説から始まります。私は「歴史的な視点を取り入れた談話分析」として解釈しています。歴史語用論とし

て一括りにされますが、実は分野の中でも多くの学派があります。たとえば、ある時代と別の時代を比較する人もいれば、特定の時代に注目する人もいます。そのうえ、扱う時代も、言語も、トピックも様々です。

歴史語用論研究の具体例として、本書の第 7 章に収録されているユッカーの論文を見てみましょう。彼は『カンタベリー物語』の『バースの女房の物語』を対象に、14 世紀後期の英語における、一人の相手に対する二人称代名詞単数形と複数形の使い分けを議論しました。当時、複数形には敬意を示すという用法がありました。物語には老婆と騎士が登場するのですが、老婆は騎士に対して敬意を示すために複数形で呼びかけています。ですが、老婆が騎士に対する生殺与奪の権利を得た際、彼女は敬意の用法がない単数形を使います。ユッカーはこの現象を、騎士よりも老婆の「状況の地位」が高いとして説明しました。

代名詞の使い分けを考えることは、物語における登場人物間の流動的な関係性を明らかにすることのみならず、過去のコミュニケーションのあり方を考えることにもつながります。すなわち、文字媒体では残されていない口頭の発話を、文献における限られたデータから再建していくという作業です。これが歴史語用論

## 第 582 回：おすすめ図書の紹介 (MS)

の意義であり、醍醐味ともいえます。

これ以外にも多くの事例研究が収録されているので、関心のあるものから読んでいくのをおすすめします。とくに、コーパス研究との関係を論じた第 2 章、18 世紀ドイツ語の代名詞における 5 段階の使い分けを扱う第 8 章、日本語の敬語における「はべり」の変化を扱う第 9 章などが、入っていきやすいと思います。それでは。